

1, 研究テーマ

―はじめに―

本校は、中央アルプスの裾野に広がる伊那市街地を一望できる伊那西部の小高い丘陵地帯に位置する全校児童 56 名の小規模の学校である。校歌に「小沢、小黒の水清く 瀬は鳴り響く北南」「四方の眺めうち開け」と歌われるように、恵まれた自然環境と、地域の方々のあたたかな支えの中で、地域の特色が活かされた教育活動が営まれている。

―小規模特認校スタート―

本校は、70 年前（昭和 25 年）の開校当時はおおよそ 300 名の児童数であったが、昭和 63 年には 100 名を切り、以来急激な減少を続け、現在は、学校存続に向けた児童数の確保が課題となっている。そういう中であって、平成 30 年 4 月より、「小規模特認校」（校区を超えて市内の児童の転入学が認められた学校）としてスタートすることになったが、これを機に、これまでの教育活動を見直し、本校の特色がより活かされることを念頭に、新たな教育課程の編成を進めてきた。

―本校の特色ある教育―

特に本校が柱とする『自然の中での教育活動・自然（科学）の体験学習』を推進するために、「林間」と呼んでいる校舎の南側の約 1.4ha の森（令和元年 2 月現在、胸高直径 10cm 以上の樹木では、42 種類 605 本の樹木が生育する）を学びの対象としながら、

◎伊那西小の特色ある教育の基本方針

「森がぼくらの教室だ」

- ① 豊かな自然の中で学びます
- ② 地域に根ざし、地域と共に歩みます
- ③ 少人数を活かして学力向上を図ります

を据え、以下の 3 つを、取組みの具体的な内容として置き、教育課程の編成を進めてきた。

- ① 自然との関わりを深くしていく『学年自然研究』『自然観察プログラム』
- ② 宮沢賢治の世界のような「森」が絵になり、音楽になりと理科に限らず学習が広がっていく『自然やふるさとに学ぶ学習』
- ③ 身近にいる人や、専門家を講師に招いて学ぶ『地域プロや、専門家による授業』

以来 3 年目の今年だが、児童の「自然への愛着」「自己肯定感」「循環の考え方」「追究力」「学び方」の変容

の姿（後述）に、一定の成果が表れてきているものと考えている。

―研究テーマの設定―

今後は、以上述べてきた教育方針のもと、本校の特色を生かした活動や願いが、持続・継承され、充実・発展しながら紡がれていくことを願い、研究テーマ「学校の特色ある教育の持続・発展に向けた取り組み」を設定した。

2, ねらい

―数年で職員が入れ替わる学校と成長する森―

本校は、これまでも、「全日本学校関係緑化コンクール（平成 9 年）」「緑化推進運動内閣総理大臣賞（平成 14 年）」「長野県ふるさと森づくり賞（平成 31 年）」など、林間での教育活動で表彰を受けている。しかし、学校職員の異動があったり、林間での活動に職員自身の得意不得意意識があったり、70 年前は、1.2m～1.5m の樹高だった苗木が、20m、30m にまで成長し、森の成長とともに、児童の目の高さでかわれる樹木が少なくなったり、枝の落下が危惧されるなどの要因で、しだいに林間から足が遠のき、表彰当時の学びが、引き継がれ、発展されたりすることが難しくなったり、また復活したりを繰り返してきていた。現に小規模特認校に指定された 3 年前も、かつての林間にあったアスレチックや水道施設などの施設は老朽化し、職員も児童も、日常的に林間を学習に活用したり、休み時間に遊ぶ姿も少なかった。

―引き継がれる教育理念―

同じ伊那市内の中学校区を本校とともにする「伊那小学校」がある。ここでは、「総合学習」が始まってから、今年で 42 回目の公開授業研究会を迎える。総合学習が始められたその当時の教育理念は年々引き継がれ、今なお、常にそこに立ち返りつつ教育活動が営まれている。伊那小学校における不易な部分は脈々と引き継がれている。

―自然を対象とした教育―

本校が柱とする『自然の中での教育活動・自然（科学）の体験学習』は、スウェーデンなど、諸外国でも大いに実践され、ここ長野県でも豊かな自然環境や多様な地域資源を活用した様々な体験活動を積極的に保育や幼児教育に取り入れる教育活動（信州やまほいく認定制度）が行われ、ここ伊那市においても、本校にも通

う近隣の保育園など8園が実践しており、その取り組みへの期待や可能性は大きい。

—持続発展のために—

このように、小規模特認校として「林間」を対象として、改善されてきた本校の特色ある教育課程が、引き継がれ、さらに検討され、醸成されたり、発展したりしていくにはどうしたらいいか。本研究では、そのあり方の具体について、学校文化（教育理念、教育活動など）を年々つないでいるものとして、「森林(林間)」「学校職員(教師)」「地域」「児童」の4つの面からの実践を通して明らかにしようとしたものである。

3. 内容

(1) 学校の特色の核をなしているもの(林間)がつなく—学校の宝—

林間での全校行事として「林間マラソン」「全校飯盒炊爨」「ものづくり教室」「シイタケの菌うち」、新たに令和2年度から「全校笹かり」「落ち葉集め」などが行われている。

卒業生のAさんは、「私たちは入学したときから当たり前のように林間があり、当たり前のように活動や遊びをしてきました。林間の中は、夏は涼しく鳥のさえずりもよく聞こえました。私は林間の中で生活してきてとてもよかったです。私は林間の中で生活してきてとてもよかったです。私は林間の中で生活してきてとてもよかったです。」と卒業時に綴った。地域の方は「林間でマラソンをしたり、小屋があったりと子どもにとってもとてもわくわくするものだと思います。とても素晴らしい環境にある学校です。」「西小の特色として今後もぜひ残して欲しい。」という声を寄せていただいた。学校の宝であるこの林間を学びの舞台とすることで、「自然を科学する子の育成」をめざしている。

しかしながら、樹齢70年のこの林間の森は、樹木が背丈を増し、倒木や枝の落下など安全面への危惧、あるいは整備しようにも樹木の重量も増し、伐採・搬出など、ますます手を入れることが困難になっているという声が上がってきていた。

—森ビジョン—

そこで、この林間を、ビジョンを持って計画的に森林整備を進めていく必要があると考え、学校と、専門家、地域の方々との複数回の懇談を開いてきた。

策定された森ビジョン

◎願う林間→学びたくなる森!絵になり音楽になる森!「科学する」にふさわしい森!

に向けて、広い森を、ゾーニングし、「集いの森」「巨

木の森」「学びの森」の三つのエリアに分けて、整備していくことにした。

特に「学びの森」は、ここを4区画に分け、そのうちの一区画の10m×200mを平成31年に皆伐した。6年に一度の皆伐の1期目のことであるが、6年×4期の計24年かけて「学びの森」エリアは、全面が更新されることになる。

—いつの日か児童が大人になって—

平成31年1月から3月にかけて行われた、この区画の大皆伐時、地元有志の皆さんの手で、大木が音を立てて次々と地響きとともに倒されていく様や、皆伐され切り株だけになった区画から、やがて命が芽吹いたかのように樹木が一斉に成長するその生命力を目の当たりにした児童は、いつの日か児童が大人になって、この林間を訪れる時、多様な命を育む林間の過去や未来に様々な思いを馳せることになるだろう。

皆の願いをもとに、策定された森ビジョンに沿って整備されていく林間という対象と、児童・地域の方のかかわりは、個々想いは異なれど、先々の大きなつなぎ役になることが期待できる。次の皆伐は、現在の在校生全員が卒業する4年後に、次の区画が、今回も手を貸していただいた地域有志の皆さんの手で行われる予定である。

(2) 教師がつなく

—修養—

昨年2月の学校公開時に、私たち人間の側が木や森に関心を持ってもらうかわりをどうつけていくかをテーマに、長年ご自身で実践されたり、全国の学校を取材し、本を執筆されておられる森林ライターのHさんから「森の恩恵を子どもたちに」という演題で講演をいただいた。Hさんから、全国で森林を対象として実践されている各校の実践を交えてお話いただき、森林での学習を、体験活動にとどまることなく、確かな学びへと導く森林と教育を考える上での根っことなる部分を教えていただいた。このような、いわば森林を対象とした自然体験学習の教育哲学や精神といった土台となることでの研修を重ねることで、私たちは、確かな考えのもとに実践を積むことができる。

今年度はコロナ禍でかなわなかったが、Hさんを中心講師として、年度初めの4月5月ごろに講演をいただき、その後、8月9月ごろ、教師が森での体験をすることをセットにし、教師自身が森で学ぶ価値を感じ得できるよう研修を持つことが、大切であると考えて

いる。

このように、学校に教育哲学があり、それが共有され、そこに立ち返ることができるような仕組みが学校にあることが、学校文化の持続発展には重要であると考えられる。

—研究—

長野県の各学校には、学習指導研究会であったり、重点研究会であったりと名称は様々だが、「学習の指導法の研究」の時間が週に一度程度、位置づけられている。この時間に今年度「林間の教材化」を短時間ではあるが、確保することができた。そこでは、総合的な学習の時間や教科などで、森を教育に活用している実践校の事例を扱ったり、林間を使った学習の場面や単元の発表や今後の林間での全校行事の計画などを発表し、林間での学習について、共有化を図ってきた。

手探りの中ではあるが、年度当初に年間指導計画を立てるにあたって、森を活用できる単元を洗い出して、その後、実践を重ねてきている。やはりコロナ禍の中で、思うようにすすめることは難しかったが、以下、総合的な学習の時間や学年の各教科で、11月までに各学年で扱ってきた題材や単元を以下に挙げる。

【総合的な学習の時間】

3年「森のお店屋さん」

4年「伊那西小学校に来るチョウ」

5年「林間に本格的な小屋を建てよう」

6年「林間の樹木に樹木名プレートを付けよう」

【学年で扱われた教科「単元」】

国語 「くじらぐも (1年)」「詩 (2年3年4年)」「短歌俳句に親しもう (4年)」「森へ (6年)」

社会「縄文のむらから古墳のくにへ (6年)」

算数「長さ (2年)」「重さ (3年)」「角度 (3年)」「円周と直径 (5年)」「図形の拡大と縮小 (6年)」

図工「林間ものづくり教室 (全校)」「リース作り (1年)」「小さな自分のお気に入り (3年)」「森の芸術家 (4年)」「まだ見ぬ世界 (5年)」

音楽「林間を題材に音楽会で『きらめきの森の一日 (1年)』」「鍵盤ハーモニカでカッコウの声を聴きながら、『鍵盤ハーモニカ (2年)』」「リコーダー奏 (3年)」「『もみじ歌唱 (4年)』紅葉している木や葉を探す」「鑑賞 (5年) 曲のイメージ・林間の光や風や生き物」

体育「マラソン (全校)」

生活科「自然観察 (講師を招いて) (1年2年)」

道徳「生きている仲間 (3年)」「命の旅 (6年)」

特別活動 (全校)「きらめきの森写真展」「林間と親しむ日」「全校笹かり」「全校落ち葉集め」

これらを出し合い、課題や改善点を出してブラッシュアップしていくことで、他の単元に広がったり、次年度につながる具体的な場面やヒントやイメージを持ったりすることができた。

この学習指導研究会のなかで、

1年生のAくんは、林間でマツボックリをたくさん拾っていた時、めずらしい形の木の実などを教師といっしょに拾った。拾いながら、「林間には秘密がいっぱい！」とうれしそうに何度もつぶやいていた。

2年生のOさんは、「木のあかちゃんをみつけよう」という生活科の学習の中で、木のあかちゃんの絵だけではなく、一本の木が切られ、切り株となり、その横から、あかちゃんが生え、水と太陽の光を浴びて成長し、大きな木となるという木の一生について考え、絵で表していた。木の成長についてそこまで思いを巡らすことができる2年生の姿に驚いたと担任は語った。このように、特別な配慮を要する児童の児童が林間という場所で、その子らしく、楽しげに学ぶ姿も話題となった。

教室を出て、森で学ぶ子どもたちの生き生きと伸びやかに発せられる声や表情や姿とその子らしい学びは、教室を出て、林間で学ぶことの意味を私たちに教えてくれている。

このように、教師自身が林間での学びに価値を持つことは極めて重要であろう。

(3)地域がつなく

—伊那西応援隊 (コミュニティースクール) —

5年や6年で、入れ替わる教師集団である。だからこそ、地域のなかにある学校は、地域の皆さんとともに、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めていくことが、学校文化を持続可能にしていく組織の在り方であろう。また、そういう実組織をめざしていく必要がある。

本校でも、コミュニティースクールとして「伊那西応援隊」という組織がある。地域の方との懇談を重ねて、昨年度末に、伊那西応援隊に念願の“事務局”が発足した。事務局は複数年メンバーが変わらない。これによりいよいよ学校と地域とがつながる実働組織ができたことになる。

昨年度この組織のもとで、伊那西応援隊のめざす子

ども像が話し合われ、次のように置かれた。

『地域を愛し、自然を愛し、仲間を愛し、
自分の愛することができる子どもを育てよう』

この子ども像が決まるまで、会に集まった皆さんから様々な思いが寄せられた。地域の皆さんの本校児童への思いが受け継がれることを願う。

—林間の教育的価値を語り合う集まり—

次に、この事務局の代表のKさん、学習支援者をお願いしている森林のお仕事に携わっているNさん、学習支援者で同じく森林に関係する会社にお勤めのEさん、小規模特認校に認定されるにあたり貢献していただいたWさん、そして、先ほどのHさんの5名、学校からは、校長、教頭、私（教育コーディネーター）の3名の計8名で、今年度から、林間の利活用について、学期に一度、集った。まだ名称もなく、組織としても確立しているわけではないが、ここでは、夢を語ったり、支援の方向を教えていただいたり、校長の学校運営方針を知ってもらったりと、林間を舞台とした本校の特色ある教育への支援やアドバイスをいただけてきた。こういう方々との集まりが、地域と学校が一体となって特色ある教育課程の持続を可能にする有意義な場として文科省型の「学校運営協議会」のような形で、位置づいていくことを期待している。

(4)児童がつなぐ

—昨年度までの学年研究—

本校では、自然科学分野に重点をおき、

**—森のいきものひとつひとつが いかにか
いせつな存在なのか。森での学びを通して、互い
が強くつながり合って生きていることを、実感を
伴って学んでいる西小児童に—**

という基本方針のもと、特色ある教育課程を実践している。その一つに、学年ごとに自然分野の研究を行う「学年研究」の時間がある。

昨年、令和元年度は、

3年「学校に来るチョウ」

4年「コナラの研究」

5年「空が作る森」

6年「林間の歴史」

というテーマで研究をしてきた。具体的には

3年生は、「チョウの来る学校」をめざして、毎週、金曜日の同じ時間にチョウを観察し、捕獲して、種類や数をまとめてきた。2020年3月現在は、学校林のエノキ周辺で捕獲し、越冬したオオムラサキのさなぎを飼育・羽

化させた。

「最初チョウの幼虫がとても苦手で、でもどんどん慣れてきました。道にチョウが落ちていると、踏むと危ないから、助けてあげます。チョウがけがをしていたら、周りの葉っぱにけがをしたチョウをのせてあげます。(M子)」「何匹か飼っていた幼虫が死んでしまったので、今、教室で飼っているオオムラサキがチョウになるまで大事に育てたいです(H子)」「オオムラサキの幼虫が家のエノキに自力で乗っていました。自分も自力でエノキの木に登ってみたい(Y子)」「お母さんにオオムラサキは何の葉を食べるの?」と聞いたら『わからない』と言ったので、『エノキの葉っぱを食べるんだよ』と言いました。お母さんに『男すごいね!』って言われてよかったです。(T男)」のように、チョウの観察を続けることを通して、チョウへの愛着や自分自身と重ねて考えたり、自己肯定感を高めたりする子どもたちがいた。

4年生は、「コナラの研究」。皆伐された区域のコナラの切り株から芽吹いた萌芽枝の成長観察を月1回の頻度で観察。さらに学校林内のコナラの利活用として、椎茸の菌打ちの楳木(これ以前は業者より購入)を切り出し、次年度の菌打ちに活用する計画で進め、実施した。

「半年間、コナラの研究をして、コナラは昔の人たちが知恵を絞って何にでも使えるようにしてきた。葉は畑の肥料になり、木は燃やしたり、実は食べられるようにしたから、すごい。コナラは昔も今も活躍してるなあって思います。コナラには鋸歯がありますが、これにも、ちゃんと意味があるに違いありません。通学路でも切った切り株にすごくたくさん数の萌芽更新したコナラがあります。コナラって切って萌芽更新して、また木になってまた使えるから、コナラは本当にすごいなって思っています。(Y男)」のように、森の生き物の利活用と樹木の循環の見方や葉一枚の仕組みの持つ意味についても学んでいる。

5年生は、「空が作る森」というテーマで、学校林内の8か所にリタートラップを設置し、トラップ内に入る内容物を月1回の頻度で回収し、重さの計測、針葉樹・広葉樹・実・その他に分類し、同時に天気や風向の計測とともに観察を続けた。気象データに加え、リタートラップ周辺の樹木の特徴や季節による変化を考え合わせながら一年間の結果をまとめた。

「このリタートラップには広葉樹がたくさん入っているから、この近くには広葉樹が多いんだなあ和林間

に詳しくなった気がします (Y 男)」「葉が落ちる風の強さ、雨の量などたくさんの条件があってリタートラップに入ることがわかり、自然が好きになれた気がする (K 男)」「周囲の木の種類は何かとか知らない木や木の特徴や見分け方がたくさん知れた。知らないことが分かったり、考えたりするのはおもしろいことだ (T 男)」など、学びに喜びを感じている感想が聞かれた。学年研究を通して、子どもたちが自然への感じ方や、自らの学びの方の変容に気づいてきていることがうかがえる。

6 年生は、「伊那西小学校林間の歴史」。皆伐で切り出された年輪を調べたところ、およそ 70 年と 30 年の樹木が多く、その年に学校林に何が起こっていたか、地域の方々にインタビューをしたり、学校に残された文献を調査したりして、歴史を調べた。なお 6 年生は研究結果の一部をまとめ、「日本森林学会」での発表準備をしてきた。残念ながら、コロナ禍での大会中止に伴い、会場での発表は、実現かなわなかったが、学会要旨として記録を残せた。さらに、卒業記念品にと、調べた歴史を「看板」にして森に設置し、卒業していった。(以下、看板に刻まれた「林間の歴史」)

「伊那西小学校 林間の歴史」伊那西小学校の林間は、昭和二十六年の開校一周年記念事業でカラマツが約二千五百本植えられたものがもたっています。当時の木の高さは、二メートル以下の小さいものでした。その後、平成十一年から、約五百本の大規模伐採が行われ、密集していた木々が間伐されました。森には光が差し込み、風や鳥が運んできた様々な草木が成長して、今のような林間になりました。私たちは、森の中で遊んだり、学んだりする時間が大好きでした。

この林間を使った学びを深めていこうと、平成三十年度に「西小四期二十四年の森づくり計画」が立てられました。平成三十一年春には、林間の南側エリア六十五本の第一期皆伐が行われ、このエリアは「きらめきの森」と命名されました。さらに、令和元年度の冬から、第一林間・第二林間合わせて百十本の伐採がありましたが、平成十一年の大きな伐採後に、たくさんの木々が成長してきたように、今後、生命が芽生え、新しく森が育っていくのだらうと思います。

これからも、遊び・学べる林間であるために、みんなで大切にしていってほしいと願っています。林間はいつまでも伊那西小学校の宝です。 令和元年度卒業生一同

—学年がつなげる理科単元—

本校では、3 年理科「こん虫の育ち方(1)チョウを育てよう」の単元で、絶滅危惧種に指定されているミヤマシジミを教材に充てて学習を進めている。チョウの

魅力と、本校の近くにその保護区があり、外部講師として依頼できる指導者も身近にいることもその理由であった。

今年で 3 年目の取り組みとなるが、3 年で学習した児童が 4 年になった 6 月ごろ、その年の 3 年生にミヤマシジミについてレクチャー (ミヤマシジミ保護区整備や食草コマツナギの育苗など) することで、教材ミヤマシジミが、3 年の本単元に位置づいてきている。

—連学年研究への取り組み—

このように、学習が、児童から児童へとつないでいくことができる学習形態やそれに応じた内容をとることで、特色ある教育が、身構えることなく、自然のうちに引き継がれていくのではないかと考えた。

そこで本年度から、昨年まで学年ごとで行っていた「学年研究」を、5 年 (9 名) と 6 年 (14 名) の計 23 名、3 年 (6 名) と 4 年 (9 名) の計 15 名が、連学年合同で研究を行う「連学年研究」という形で実践を進めることにした。

コロナ禍であったり、実践一年目ということで、連学年研究としての成果が、見えてきてはいないのが現状だが、これまでの経過と今後の見通しについて記す。

3 年 4 年は、「森の落とし物～リタートラップを用いて～」の研究である。昨年の 5 年生の研究を引きついで研究である。昨年の研究内容や方法を見直しながら、リタートラップ 4 か所の回収・重量測定を主とし、そこで生まれた疑問や発見を大事にして、児童個々がテーマを持って追究する (遊ぶ・かかわる) という方針で進めている。

今年、10 月に新たにリタートラップを設置し、第一回の回収・計測が、12 月にされた。結果 (単位は g) は、

地点	0地点	1地点	2地点	3地点	4地点
全体の重さ	10	36	117	50	75
広葉樹の重	9	13	57	30	58

であったが、この時間の児童の気づきを以下に挙げる。

やってみたいコーナー

- ・種を埋めてみたい
- ・針葉樹を燃やしたらどうなるか
- ・広葉樹を燃やして何秒で黒くなるか
- ・針葉樹が思ったより多かったの、近くにある木の種類も調べたい

発見コーナー

- ・赤ちゃんを産んだクモかも
- ・葉っぱ発見
- ・つぼみかな？発見

疑問・不思議・びっくり

- ・ヒノキは広葉樹？針葉樹？
- ・これは何？
- ・どうやって空をゴミが飛んでくるの？
- ・クモの卵発見 よく見たらちいさいクモがいっぱい、生まれたのかな？
- ・緑色のクモがいっぱい！なんで？

なにこれコレクション

- ・グループ4の卵。あれはなんだ？
- ・この黒い種は何？
- ・なにこれ、白い綿毛！

今後は、リタートラップの研究を中心に据えながら、これら気づきをもとに、個人テーマで、それぞれが興味を持ったことを2年かけて探求していく時間になる。5年6年の連学年研究「森の恵み～先人の知恵に学ぶ～」では、次のⅠ・Ⅱの2つの内容で進めることになった。

林間の恵みプロジェクト ～西地区の歴史を知って、先人の知恵や苦労に学ぶ～

Ⅰ腐葉土を作っちゃえ！（全員で）

Ⅱ林間のできることをやっちゃえ（個人で）

プロジェクトⅠ

腐葉土作りの計画後、腐葉土作りの実験・観察へ。その後、月に一度、実験の場所を掘り起こし、葉が腐葉土化する経過を調べる。

プロジェクトⅡ 林間でやりたいことを決める

- ・林間の植物で染め物
- ・火を起こしてみたい
- ・森の食べ物を知って、それで料理をつくりたい
- ・炭を作る

今後は、やはり3年4年の連学年研究と同じく、腐葉土作りを核にしなが、個人テーマで追究する時間となる。さらに、この研究結果をもとに、5年6年児童が、全校行事「腐葉土作り」の中心となって、進めていく計画でいる。

4,まとめ

一児童がつなぐ学びへー

これまで各担任が指導していたことを児童に託して、全校行事（笹かき・落ち葉かき）の説明や実際に、6年生からの下級生へのプレゼンテーションに変えた。6年児童が担任に代わり、全校児童に、意義や手順等を伝えた。プレゼンテーション作成や、当日の説明は緊張しながらもやり終え、安堵の表情の6年生。児童が生き生きと主体的に活動する姿が、学校文化を持続・発展するためには、何よりも大切であることは言うまでもないことであるということを研究にまとめながら、改めて感じている。学校がそういう場にあるとき、自然のうちに、学校文化は持続・発展していくことになる。

一変わる授業観一

小規模校にありがちな人間関係の固定化が課題だが、連学年で学年が混ざることで、よりたくさんの考えが出されることにもなり、個々の持ち味が改めて理解されるという面も現れて、人間関係にも良好な変化をもたらしている。伸びやかさや活気が見られる。これまでの教師が知識や技能を伝達するという教育から、まさに学びの主体は児童であるという児童中心の学びへの質的転換が図られなければ、教師が替わると、学校文化は持続困難というこれまでの繰り返しとなってしまふ。新しい学習指導要領のもと、まさに私たちの児童観や授業改革が求められる。

一林間の魅力をとことん探して一

特色ある教育を持続発展させていく原動力は、その学校の特色が持つ「力」であろう。

本校においては、林間の魅力であり、さらにその共有化である。地域と学校と児童の三者が、林間の魅力を実感し、共有し、そこに積極艇にかかわることが、特色ある教育をこれからもつなげていくことになるだろう。

以上、伊那西小学校教育がますます充実し、発展することを願い、まとめとする。